火入れ　放　牧　草刈り

信州の草原の里

開田高原の半自然草原

木曽馬文化が育む、秋の七草が咲く草地

応募者：ニゴと草カッパの会　**所在地**：木曽町　**所有者**：個人　**管理者**：所有者個人、団体
面　積：5.2ha　**指定状況**：県立自然公園、県指定天然記念物木曽馬　環境省重要里地里山

草原の概要と景観

開田高原は木曽馬の主産地で、1955 年頃まで約 700 頭の馬が飼育され、5,000ha の草地が広がっていました。採草により馬を養い厩肥を生産し、農地と草地は馬を介して有機的に繋がっていました。特に長い冬期の飼葉を採る干草山は、隔年の火入れと草刈りによる伝統的管理の半自然草原で、今も残る伝統的干草山（0.5ha）では、春の野焼き、秋の刈草の仮積み（ニゴ）の景観と、木曽馬の飼養に関わる草地の伝統的利用の文化（伝統知）が継承されてきました。

御岳山と採草地のニゴ

草原を特徴づける動植物

カリヤスを含むススキ草原です。特にお盆の時期にはキキョウ等の秋の七草が咲きます。植物の特徴的な種としてはオキナグサ、アヤメ、ユウスゲ、クガイソウ、カワラナデシコ、オミナエシ、ワレモコウ、マツムシソウ、ウメバチソウがあげられます。昆虫では希少種のチャマダラセセリ、コヒョウモンモドキが生息します。

ススキ草原のキキョウとオミナエシ

草原の利用

採草、山菜、放牧、学校教育、環境学習、自然観察会

野焼きをされた草地は獣害対策の緩衝帯になり、山菜や薬草の採取場として地域住民に利用されています。伝統知の継承と草地再生を目的に、ニゴと草カッパの会により採草され、木曽馬の保護育成施設「木曽馬の里」や木曽馬を飼う移住者が草を飼葉や敷料に利用しています。コミュニティホースとして木曽馬が通う開田小学校では地域文化学習、地域住民の自然観察会等の学びの場としても利用されています。また、町による国道沿いの草地の木曽馬試験放牧は観光に活かされています。

採草の馬文化を学ぶ小学生

管　理

草刈り、刈草の持ち出し、山焼き・野焼き

地域住民による野焼き、木曽町環境協議会による希少野生動物の保護活動が行われています。大学や研究機関によって生物多様性や希少動植物と伝統的草地利用との関係が明らかにされてきました。伝統的管理の再導入による草地の再生を実証するため、市民ボランティアを派遣するアースウォッチジャパンの事業によって植生調査が行われています。

アースウォッチ植物調査

今後の展望、メッセージ

大草原ではありませんが、木曽馬をアイコンに、自然や循環、人と馬と草地のつながりを知るフィールドとして草地を活かし、体験交流や関係人口の増加等、馬と草地の新しい利用につなげたいです。何より馬が草を食べるのでやりがいがあります。

ニゴと草カッパの会
田澤 佳子